

地域資源としての炭鉱遺産の評価に関する考察

- 夕張市清水沢地区でのタウンウォッチングを事例に -

A Study of the Evaluation on Coalmine Heritage as Regional Resource

-A Case of Town Watching in Shimizusawa, Yubari City-

佐藤 真奈美* 吉岡 宏高**

SATO Manami, YOSHIOKA Hiroataka

日本有数の炭鉱都市という歴史的な文脈を有する北海道夕張市では、地域資源を活用した住民主体の観光まちづくりに可能性を見出すことができる。本研究では、26年前の炭鉱閉山当時の生活風景が残存する夕張市清水沢地区にて実施された、地域内外の参加者によるタウンウォッチングにおいて、地域資源としての炭鉱遺産の評価に消極的な地域住民と外部の人々との間に存在する認識の差を明らかにし、当地域での観光まちづくり戦略に資する知見を得ることを目的とする。

キーワード：地域資源、炭鉱遺産、タウンウォッチング、観光まちづくり

1. はじめに

2007年に北海道夕張市が財政再建団体となったことは、基幹産業の消滅により打撃を受けた産炭地域の再生が難題であることを、改めて浮き彫りにした。

夕張市は、1890(明治23)年の夕張採炭所開鉱以来、石炭産業の消長と運命をともにした。炭鉱末期以降は「炭鉱から観光へ」をキャッチフレーズに、当時の市長主導によるリゾート開発や遊園地運営、映画祭の開催など次々に大型観光事業を展開した。しかしマスツーリズムに依拠した観光開発や、産炭地域振興臨時措置法による優遇措置の失効などにより、財政は危機的な状況に陥り、財政再建団体入りした際には赤字額は353億円にも及んでいた。石炭産業の最盛期である1960(昭和35)年に107,972人を数えた人口は、現在ほぼ10分の1にまで減少している。

18年の財政再建期間においては、観光への新規・追加投資は財政的に困難である。しかし、観光の経済・社会効果を勘案すると、単に観光を忌避するのではなく、持続可能な観光のあり方が模索されるべきである。制約条件下での夕張市における新たな観光展開は、日本有数の炭鉱都市として発展した歴史的な文脈に位置づけられる、足元の地域資源に新たな価値を見出し、住民自らが主体となり進められる観光まちづくりに、可能性を見出すことができるのではないかと考えた。

そこで本研究では、炭鉱時代の生活風景が色濃く残る夕張市清水沢地区にて実施された、地域住民および地域外部の人々を対象としたタウンウォッチング(以下TW)において、炭鉱の歴史的な文脈に依拠した地域資源の評価に対するそれぞれの認識の差を明らかにし、当地区における観光まちづくり戦略の策定に資する知見を得ることを目的とする。

2. 清水沢地区の概観

清水沢地区は、夕張川と志幌加別川沿いにY字形に集落を形成する夕張市の中部に位置している。夕張本町方面と鹿島・南部方面との鉄道・道路の分岐点であり、物資や人の集散地として商業を中心に発達した。2008年8月末現在、人口は夕張市全体の約23%にあたる2,727人であり、最多の人口を有する地区である。

戦後、傾斜生産期の1947(昭和22)年に北海道炭鉱汽船(株)(以下北炭)清水沢炭鉱が開鉱したことにより、炭鉱関連機能が集積した。1975(昭和50)年には清水沢清陵町に北炭夕張新炭鉱が開鉱し、それまでの木造炭鉱住宅からブロック造りの改良住宅への建て替えが進み、現在の街並みが形成された。

清水沢地区の特徴は、図-1に示すように、市北部地区に比べ炭鉱閉山が遅いことである。北部地区で炭鉱跡地を転用した大型観光開発が展開された1980(昭和

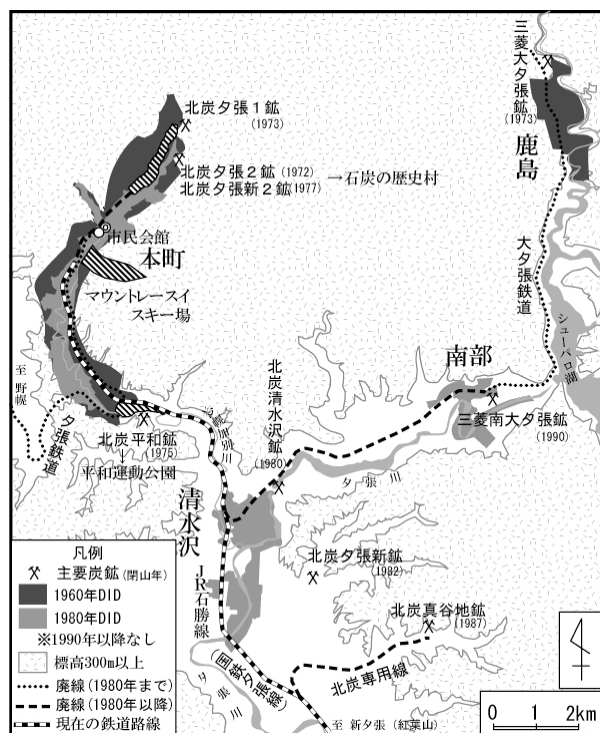


図 - 1 夕張市の主要炭鉱及び人口集中地区 (DID)

55) 年前後、清水沢地区を始めとする市南部地区では炭鉱が操業中であり、大規模な観光開発に利用されることがなかった。炭鉱閉山後、多くの炭鉱関連施設は撤去されたが、旧北炭清水沢発電所・清水沢ダム・ズリ山など大型施設のほか、炭鉱住宅街や繁華街など当時の街並みがほぼそのまま残存しており、このような炭鉱遺産の質・量は、ともに特筆すべき価値を有する。

しかし地域に残存する炭鉱遺産に対する地域住民の価値認識は皆無に等しく、保存や活用に取り組む住民活動などは行われてこなかった。「炭鉱は暗い・負のイメージである」という固定的なパラダイムや、夕張市が観光に傾倒して破綻したことも、消極的な姿勢に影響していると考えられた。

そこで筆者らは、地域住民が改めてわがまちを見つめなおす機会の設定により、地域資源の価値を再認識することにつながると考えた。さらに、外部の視点、つまり観光の視点を加えることで、外部との意識のズレを認識し、具体的な行動に結び付く糸口となるのではないかと考えた。

3. 研究方法

2008年7月6日(日)、NPO法人炭鉱の記憶推進事業団ならびに北海道空知支庁の共催により、清水沢地区

で開催された「清水沢まち歩きTW」において、地域内外の参加者による地域資源探しとその評価を、写真投影法⁽¹⁾ならびに事後のワークショップにて行った。

参加人数は市内12名(4グループ)、市外14名(5グループ)、専門家5名(2グループ)、計31名(11グループ)であり、グループごとにデジタルカメラ・地図を持ち、「誇れる(いいと思う)もの」を撮影しながら清水沢地区⁽²⁾を歩いた。有効撮影枚数は899枚である。事後のワークショップでは、まとめ作業とグループごとに「清水沢地区の誇れるものベスト3」の選択を行った。またこの結果を踏まえ、それぞれの地域資源に対する個人の評価を質問し、地域資源の評価要因を考察するための追加調査を行った。

4. 地域内外の参加者による地域資源の評価

(1) 撮影対象の分析

参加者により撮影された写真を分析し、地域資源をどのように認識しているかを考察する。まず斎藤ら⁽²⁾を参考に撮影対象を分類し、その結果7分野36カテゴリの地域資源を選定できた⁽³⁾。この地域資源の分布を図-2に、一覧を表-1に示した。

【炭鉱関連】・【遺構・廃施設】は、炭鉱操業区域であった北東部から中央部にかけて多く分布し、炭鉱の名残をとどめていると言える。一方【文化】・【生活関連】施設は、繁華街である清水沢駅前に多く分布している。一つ一つの撮影枚数は多くないが、民家・通りなど多様な地域資源が繁華街には存在していることが伺える。また繁華街を見下ろすように位置する山林部分には【廃校】や【清水沢神社】などがあり、周囲と乖離した、異空間的な存在となっている。

地域資源の撮影枚数では【清水沢発電所】を始めとする【炭鉱関連】資源だけでなく、【廃校】・【特徴的な民家等】など、炭鉱があり繁栄した時代の面影を残している施設・建造物・街並みなどが中心に撮影された。

市内参加者(以下《市内》)と外部参加者(市外・専門家、以下《外部》)の差異という枠組みでみると、撮影枚数は《市内》1:《外部》9と大差が開いた。どちらも【炭鉱関連】を最も多く撮影していたが、2位は《市内》で【自然】・【生活関連】・【遺構・廃施設】が同数(17%)、《外部》はどちらも【生活関連】(市外39%、専門家34%)であり、《市内》は《外部》と比較すると、相対的に【自然】を高く、【生活関連】を低く評価している。

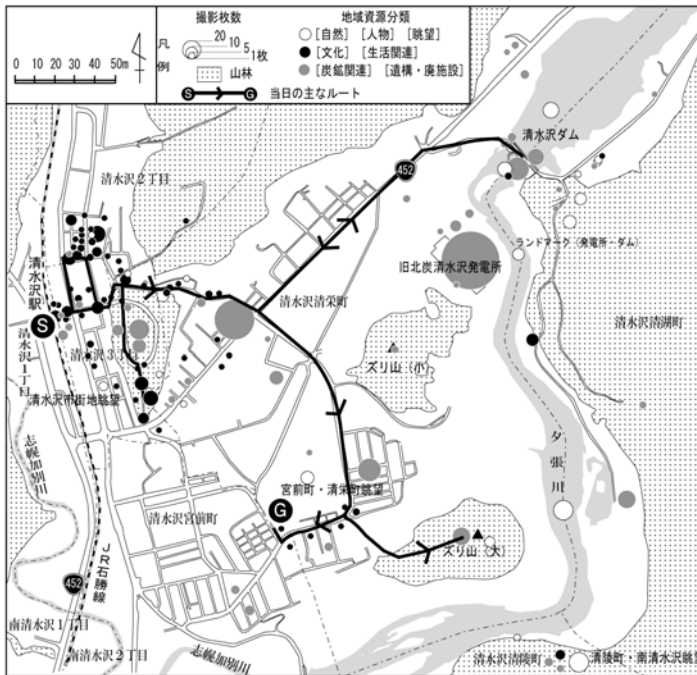


図 - 2 撮影された地域資源の分布

表 - 1 撮影された地域資源一覧

分類番号	分野名	市内	市外	専門家	撮影枚数 合計	撮影 枚数	撮影グループ 数の合計
10	自然	15	65	17	97		
11	11 山林	1	8	2	11	24	5
12	12 植物	2	19	5	26	13	6
13	13 地形	2	12	2	16	18	6
14	14 鳥	3	2	2	5	32	4
15	15 水面	7	26	6	39	8	9
20	20 人物		3	3	6		
21	21 人物		3	3	6	29	2
30	30 文化	7	21	24	52		
31	31 地蔵	1	3		4	34	3
32	32 清水沢神社	3	13	24	40	7	7
33	33 寺	1	5		6	29	3
34	34 墓地	2			2	36	1
40	40 生活関連	15	132	79	226		
41	41 公共施設	2		1	3	35	2
42	42 環清水沢小学校	3	4	1	8	27	5
43	43 JR清水沢駅	1	13	10	24	14	4
44	44 電気・水道		25	8	33	10	3
45	45 道路・橋・階段		22	10	32	11	6
46	46 特設的な民家等	2	32	28	62	2	7
47	47 技巧を活かした生活設備	5	11	4	20	16	6
48	48 繁華街	1	23	14	38	9	6
49	49 商店・企業	1	2	3	6	29	5
50	50 炭鉱関連	36	213	91	340		
51	51 清水沢ダム	5	36	13	54	6	9
52	52 清水沢発電所	9	79	20	108	1	11
53	53 ズリ山	11	18	3	32	11	9
54	54 木造炭住	3	18	34	55	5	9
55	55 改良住宅群	7	41	13	61	3	8
56	56 宮前町浴場	1	2	7	10	26	3
57	57 旧清水沢炭鉱関連その他		19	1	20	16	4
60	60 遺構・廃施設	15	82	33	130		
61	61 観光施設遺構	6	16	2	24	14	6
62	62 廃屋		12	1	13	23	3
63	63 廃止公共施設	2	7	6	15	21	8
64	64 廃校	4	31	21	56	4	9
65	65 鉄道廃止設備	2	12	2	14	22	2
66	66 遺構・廃施設その他	1	4	3	8	28	
70	70 眺望	1	26	21	48		
71	71 清水沢繁華街眺望		2	3	5	32	3
72	72 清水沢・宮前町眺望	1	7	8	16	18	5
73	73 清陵町・南清水沢眺望		11	5	16	18	5
74	74 ランドマーク		6	5	11	24	6
	撮影枚数の合計	89	542	268	899		
	資源数の合計(T=36)	28	33	32			

撮影資源数においても《外部》の方が多かった。《市内》のみ撮影したのは【墓地】1資源であったが、《外部》のみが撮影した資源は、【人物】や【道路・橋・階段】など、地元住民とのふれあいや地域生活に密着した資源や、【炭鉱関連その他】、【廃屋】など現在使用さ

れていないもの、風化・劣化・撤去済みなどで注意しないと見落としてしまうようなものであり、このようなものが《外部》からの視線では資源として認識されていると言える。

(2) 参加者による地域資源の評価

グループで撮影した写真から3枚選び、「清水沢が誇れるものベスト3」として理由を記述する方式により、参加者による地域資源の評価を行った。3位までに挙げたグループが最多であったのは、「ズリ山からの眺望」(9グループ)である。評価理由は「絶景」「空気がきれい」という高所の利点を評価する意見のほか、「石炭が積もって山になった」ことへの賛嘆もみられた。続いて「清水沢ダム」(7グループ)は、最多の4グループから1位評価を受けた。視対象・視点場の両方として評価されており、「ダムと発電所をセットで見ることで、より歴史性のある景観とを感じる」という意見があった。このこ

とから、前項の撮影対象としての分析からは明確に現れなかったものの、「眺望」は清水沢地区の誇れるものとして、多くの参加者に認識されていると言える⁽⁴⁾。地域資源そのものの価値だけではなく、地域資源をどのように眺めるかという視点も必要であり、ズリ山とダムという恵まれた視点場を活用する方が望まれよう。

(3) 参加者の行動と感想

参加者が記入した感想を、当日の行動と関連させて考察する。《市内》は、全グループがズリ山登山を行い、3グループが範囲外としていたほぼ無人である地区まで訪問していた。感想文からは「懐かしく」「改めて」などの表現が多く、実際に現地を歩くことで記憶がよみがえってきたり、新たな発見や再認識したりする契機となったことが伺える。

《外部》からは様々な反応がみられ、新たな発見をしたり、《市内》とのふれあいに好印象を持ったりしていた一方で、客観的に厳しい意見を述べたり、あまり奥部に足を踏み入れようとせず、コンビニエンスストアや農産物直売所のような、《外部》にとって馴染みやすい施設を利用していただグループもあった。

(4) 追加調査

清水沢地区の地域資源の評価要因を確認するため、(1)で選定された地域資源から撮影枚数が多いものを中心に抜粋した14資源に対し、改めて個人の評価を質問する追加調査⁽⁵⁾を行った。

TWの結果と同様、[炭鉱関連]への評価は全体に共通して高く、【廃校】・【特徴的な民家等】など、そのほかの資源に対する市内外の評価の差異についても、ほぼ同じ傾向であった(表-2)。歴史性や物語性などを

表-2 地域資源の評価平均値

※	資源名	市民	外部	全体
11	山林	4.14	3.86	4.00
15	水面	4.43	4.08	4.21
32	清水沢神社	3.50	4.40	4.06
44	電気・水道	2.33	2.86	2.62
46	特徴的な民家等	3.00	3.64	3.41
48	繁華街	3.33	4.08	3.83
52	清水沢発電所	4.43	4.92	4.74
51	清水沢ダム	4.57	4.67	4.63
53	ズリ山	4.29	4.25	4.26
54	木造炭住	3.43	4.36	4.00
55	改良住宅群	3.29	3.73	3.56
64	廃校	3.14	4.67	4.11
65	鉄道廃止設備	3.00	3.50	3.31
73	清陵町・南清水沢眺望	4.43	4.58	4.53

※ カテゴリ番号
 評価する記述が多く、炭鉱という地域の文脈を感じられることが、評価の大きな要因となっていることが明らかとなった。ただしこの資源からそれを見出すかの基準は個人差があり、市内外の違いだけではなく、個人の背景や感性によると言える。また本調査はTWから2ヶ月経過した時点で行われたが、TW後に何らかの認識の変化が起こった様子は、特に《市内》には見られなかった。

5. まとめと今後の課題

以上のことから、今回のTWにおいて清水沢地区の地域資源は、炭鉱という地域の文脈の中に位置づけられる、炭鉱関連施設や繁栄した時代の面影を残すものを中心に認識されていることが明らかとなった。さらに《市内》と《外部》の間には、地域生活に密着した文化・生活関連資源、地元住民とのふれあいなどにおいて評価に明確な差異があり、炭鉱遺産への認識が異なることが判明した。

《市内》においても、炭鉱という文脈を地域資源と認識しており、このような催事が、地域資源の発見や再認識に一定の役割を果たす可能性があると言える。さらに外部の視線との比較により、地元住民だけでは気づかない資源の発掘という効果が得られた。しかし、今回のTWでは自らの資源に誇りを持つという心境の変化には至らず、また撮影可能である表面的な資源のみが対象であることで、人々の記憶や暮らしの様子など内面的な資源を考慮できないという問題があった。

これらの課題に対処すべく、2008年10月19日(日)に居住中の旧炭鉱住宅を公開するという催事を実施した⁶⁾。公開に応じた地域住民は「何を見るつもりなのか」と懐疑的であったが、炭鉱時代の話や自身が所有する資料だけではなく、自らの現在の生活風景そのもの

のに対し、大勢の参加者が関心を持つ姿に驚いた様子であった。参加者は丁寧に整えられた住宅に驚き、「空き家を見学するのではなく、実際に元炭鉱マンの居住者と話をできたのがよかった」との声が多数あった。

今後も地域内外の人々が双方向的な関係を築くことにより、地域資源の価値を認識し、住民主体の行動を促進するための継続的な取り組みが必要とされよう。そのために、炭鉱遺産を活用したエコミュージアムなど、住民が観光を通じて地域への誇りを表現しつつ生活するための概念の導入を検討すべきである。

【補注】

(1) カメラをある空間の利用者に貸与し、一定のテーマで撮影した後回収して、撮影された写真を分析することにより、人々に認識された環境の特性を明らかにする調査方法³⁾。写真を撮影するという行動により、地域資源を発見するという目的をより明確化させ、また一枚の写真には膨大な情報が含まれるため、参加者の調査協力への負担を最小限に抑えることができることなどから採用した。

(2) 時間と移動距離の関係上、清水沢1~3丁目、清水沢清栄町、清水沢宮前町を範囲としたが、清水沢清栄町まで足を延ばしたり、清水沢清栄町を遠望して撮影したグループもあったので、考察に含めている。

(3) 有効撮影枚数899枚について中心に写っているものを判別し、場所・固有名・説明部分などを省いた上で、類似性の高いものを集約した。なお本稿では[分野名]、【資源名】のように表記する。

(4) 本稿では言及できなかったが、撮影写真の視点場での分類では、ズリ山と清水沢ダムは、全体の84%を占めていた(至近距離を除く)。

(5) タウンウォッチング参加者全員を対象とし、2008年9月に郵送法で行った。14資源の評価を5段階で質問し、それぞれについてコメントを求める内容で、調査票配布枚数31票に対し、回収枚数は19票(61%) (内訳:市内7通(58%)・市外8通(57%)・専門家4通(80%))であった。

(6) NPO法人炭鉱の記憶推進事業団・北海道空知支庁の共催により、清水沢宮前町・清栄町にて実施。タイプが異なる6軒の旧炭鉱住宅(うち1軒は空き家)を公開し、80名の参加があった。関連催事としてズリ山登山や炭鉱時代に開設された公衆浴場への入浴体験なども実施した。

【参考文献】

- 1) 吉岡宏高(2007):夕張における石炭産業の歴史と地域の変容-夕張市財政破綻を理解するための基礎知識、北海道自治研究、465、pp.2-9
- 2) 斎藤亮司・藍澤宏・北島千寿(2001):農村集落における住民の居住環境評価からみた地域資源認識に関する研究、農村指画論文集、第3集、pp.1-6
- 3) 奥敬一・深野加津枝(2003):森林レクリエーション行動下における景観体験の生起パターン、日本林学雑誌、85(1)、pp.63-69